

富田林市文化財調査報告書 69

令和 2 年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

2021. 3

富田林市教育委員会

はじめに

大阪府の南東部に位置する富田林市は、市の中心に流れる石川によって形作られ、平野部と周囲を緑豊かな丘陵に囲まれた自然に恵まれたまちです。一方で、市西部において計画的に開発されたニュータウンや、歴史的な町並みを今に残す富田林寺内町（重要伝統的建造物群保存地区）など、人間の営みが新旧の調和をもって共存しているまちでもあります。

近年、富田林市内では新しい遺跡の発見が続いていますが、本年は3つの遺跡が発見され、1つの遺跡で遺跡範囲が拡大されました。いずれも本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な発見となりました。

本書は、令和2年に富田林寺内町遺跡と喜志南遺跡で行った埋蔵文化財の緊急発掘調査成果についてまとめた報告書となります。今回の調査でも、それぞれの遺跡において新たな知見を得ることができました。これらの調査成果については学術的な方面はもちろん、学校・生涯学習教育の場でも広く活用されていくことを望んでおります。

最後になりますが、緊急発掘調査および本書の刊行におきまして、ご理解とご協力頂きました関係者の皆様には感謝申し上げます。

令和3年3月

富田林市教育委員会
教育長 山口 道彦

例　言

1. 本書は、令和2年度国庫補助事業「市内遺跡緊急発掘調査事業」の報告書である。
2. 本事業は、富田林市教育委員会文化財課が、令和2年4月1日から令和3年3月31日にかけて実施した。
3. 令和2年の現地調査および整理作業は、同課職員 河東 潤・角南辰馬・林 正樹、同課非常勤職員 西村雅美・渡邊晴香が担当し、同課非常勤職員 桑本彰子がこれを補佐した。
4. 本書の第2章以降の調査成果については、整理作業等の都合から、令和2年12月28日までに現地調査が終了したものを掲載した。また、現地調査は令和元年度に実施したが、整理作業の完了が令和2年度となったものについても、本書に掲載した。
5. 発掘調査成果について、第1・2章は渡邊、第3章は西村、編集は渡邊が行った。
6. 本報告書で掲載している出土遺物、図面、写真などの資料は、すべて本市教育委員会で保管・管理している。
7. 発掘調査にあたっては土地所有者をはじめ、関係者各位の理解と協力を得た。ここに併せて感謝の意を表したい。

凡　例

1. 本書で使用する標高は、東京湾標準潮位（T.P.）で表示している。
2. 現地調査における土色の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1970）を使用した。
3. 引用・参考文献は各章末に示した。

目 次

第1章 令和2年の調査状況 ······	1
第2章 富田林寺内町遺跡（G C2019-1）の調査	
第1節 調査の経緯と経過 ······	5
第2節 調査の成果 ······	7
第3節 まとめ ······	12
第3章 喜志南遺跡（K S S2020-1）の調査	
第1節 調査の経緯と経過 ······	14
第2節 調査の成果 ······	14
第3節 まとめ ······	19

報告書抄録

挿 図 目 次

図 1 新規発見・範囲拡大遺跡 ······	3
図 2 市内遺跡分布図 ······	4
図 3 調査地位置図 ······	5
図 4 調査区配置図 ······	5
図 5 東壁断面図 ······	6
図 6 地層断面模式図 ······	7
図 7 第 2 調査面全体図 ······	8
図 8 第 2 調査面個別遺構断面図 ······	9
図 9 第 1 調査面全体図 ······	10
図 10 第 1 調査面個別遺構断面図 ······	11
図 11 出土遺物実測図 ······	12
図 12 既存建物平面図 ······	12
図 13 富田林寺内町の絵図 ······	13
図 14 今回調査地及び既往調査地位置図 ······	14
図 15 遺構平面図及び土層断面図 ······	15
図 16 2018年度・2020年度遺構平面合成図 ······	15
図 17 主要土坑断面図 ······	16
図 18 出土遺物（古墳時代～中世） ······	17
図 19 出土遺物（縄文土器・石器） ······	18

表 目 次

表1 発掘届（通知）受理件数	1
表2 発掘調査一覧	2
表3 試掘調査一覧	2

写 真 目 次

写真1 第2調査面	9
写真2 第1調査面	11
写真3 SK21 石礫・サヌカイト剥片	17

図 版 目 次

かがみ 富田林寺内町周辺航空写真（富田林市撮影 2018年）	
図版1 富田林寺内町遺跡（G C2019-1）	
第2調査面全景（南より）	
SD143 トレンチ①東壁断面と三和土層のようす（西より）	
図版2 富田林寺内町遺跡（G C019-1）	
第1調査面全景（南より）	
第1調査面北側完掘状況（西より）	
図版3 喜志南遺跡（K S S2020-1）	
検出状況全景（西から）	
調査区西側全景（南から）	
調査区北側全景（西から）	
図版4 喜志南遺跡（K S S2020-1）	
SK1（南から）	
SK17・SP17-b（北から）	
SK21（北から）	

第1章 令和2年の調査状況

令和2年1月から12月の間において、文化財保護法第93条・94条に基づく発掘届・発掘通知の提出があったのは、表1のとおりである。集計結果をみると受理件数は186件で、昨年の169件よりも多くなっている。

民間開発に伴う発掘届出件数をみると、昨年より18件増加している。届出の原因別に届出の増減をみると、個人住宅が15件多くなっている。これは前年に500m²以上の宅地造成件数が多かったため、その造成地での新築工事の届出が集中したためと考えられる。

これらの届出を受けて行った発掘調査は17件で(表2)、去年の25件より少ない。昨年は事前調査から本調査へと続いたもののが多かったためである。本年行った本調査は3件で、そのうち民間の開発による本調査は1件、残りの2件は国庫補助による調査である。

一方で、埋蔵文化財包蔵地外での試掘調査については15件実施した(表3)。そのうち、2件の調査で遺跡の新規発見、1件の調査で範囲拡大となった。若松町四丁目で発見された松葉山遺跡は、前年に新規発見された新堂東遺跡の南100mに位置する。中世の遺構と遺物がみつかったが、遺構面保護のうえでの施工となつたため本調査は行わなかった。もう一つは錦織北二丁目で発見された錦織ドイ遺跡で、試掘調査後に本調査を実施し、縄文～中世の遺構と遺物がみつかった。この他、若松町二丁目で行った調査では飛鳥時代の遺物が出土し、調査地から南へ約35m離れた畑ヶ田遺跡の範囲拡大となった。富田林市が実施した調査ではないが、大阪府教育委員会による大字伏見堂・横山での調査で中世の遺物と共に柱穴や溝などの遺構がみつかり、西野々遺跡が新規発見遺跡となつた(図1)。

今年、国庫補助事業として調査を実施したのは昨年度調査の富田林寺内町遺跡(表2-2、第2章)と今年度調査の喜志南遺跡(表2-6、第3章)の2件である。本書ではこの2件について報告する。

表1 発掘届(通知)受理件数

	発掘届出(93条)						発掘通知(94条)						合計
	事前	立会	慎重	遺憾	進達	小計	事前	立会	慎重	遺憾	進達	小計	
道路	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	3	10	10
宅地造成	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
個人住宅	3	27	22	0	0	52	0	0	0	0	0	0	52
分譲住宅	1	20	12	0	0	33	0	0	0	0	0	0	33
共同住宅	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
賃用住宅	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
店舗	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
その他建物	7	5	2	0	0	14	0	0	0	0	0	0	14
工場	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
学校	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
公園造成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ガス	0	0	22	0	0	22	0	0	0	0	0	0	22
電気	0	0	24	0	0	24	0	0	0	0	0	0	24
水道	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	8	8
下水道	0	0	2	0	0	2	0	2	5	0	0	7	9
電話通信	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他開発	3	0	1	0	0	4	0	2	0	0	0	2	6
小計	21	52	86	0	0	159	0	5	19	0	3	27	186

表2 発掘調査一覧

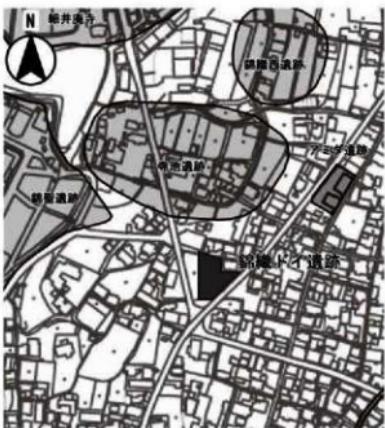
番号	調査日	所在地	遺跡名	調査原因	調査面積	調査結果	担当者	備考
1	R2/2/3	甲田一丁目	甲田遺跡	その他建物	7.8 m ²	遺構・遺物あり	渡邊	
2	R2/2/18 ～3/18	富田林町	富田林寺内町 遺跡	範囲確認 調査	110.0 m ²	遺構・遺物あり	渡邊	GC2019-1 (本書)
3	R2/2/19	錦織北三丁目	錦聖遺跡	学校	6.0 m ²	遺構・遺物なし	林	
4	R2/4/6 ～5/13	中野町一丁目	中野遺跡	その他開発	1.8 m ²	遺構なし ・遺物あり	林・角南	
5	R2/5/7	西板持町五丁目	西板持遺跡	店舗	4.1 m ²	遺構・遺物なし	角南	
6	R2/5/7 ～5/19	喜志町一丁目	喜志南遺跡	個人住宅	34.5 m ²	遺構・遺物あり	西村	KSS2020-1 (本書)
7	R2/6/3	中野町三丁目	中野北遺跡	宅地造成	2.0 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
8	R2/7/8	錦織東三丁目	錦織南遺跡	その他開発	2.5 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
9	R2/7/8	錦織東三丁目	錦織南遺跡	その他建物	1.4 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
10	R2/7/17	宮平田町	新家遺跡	宅地造成	11.3 m ²	遺構なし ・遺物あり	西村	
11	R2/7/20	中野町二丁目	中野遺跡	その他建物	3.2 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
12	R2/7/31	若松町西一丁目	中野遺跡	個人住宅	2.0 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
13	R2/8/24 ～9/10	錦織北二丁目	錦織 ドイ遺跡	店舗	46.7 m ²	遺構・遺物あり	西村	NKD2020-1 試12の本調査
14	R2/9/3	中野町西一丁目	中野遺跡	学校	9.9 m ²	遺構・遺物あり	林	
15	R2/10/22	若松町西三丁目	中野遺跡	店舗	3.5 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
16	R2/11/6	錦織南一丁目	錦織南遺跡	宅地造成	2.8 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
17	R2/11/17	若松町二丁目	畠ヶ田遺跡	個人住宅	2.1 m ²	遺構・遺物あり	角南	

表3 試掘調査一覧

番号	調査日	所在地	調査原因	調査面積	調査結果	担当者	備考
1	R2/1/29	若松町東三丁目	その他建物	2.2 m ²	遺構・遺物なし	西村	
2	R2/2/18	山中田町二丁目	分譲住宅	8.7 m ²	遺構・遺物なし	西村	
3	R2/3/10	大字廿山	その他建物	1.0 m ²	遺構・遺物なし	林	
4	R2/3/18	若松町四丁目	共同住宅	5.3 m ²	遺構・遺物あり	渡邊	松葉山遺跡の発見
5	R2/3/31	廿山二丁目	宅地造成	3.8 m ²	遺構なし・遺物あり	西村・渡邊	
6	R2/5/19	山中田町二丁目	宅地造成	5.6 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
7	R2/6/2	川面町二丁目	倉庫	3.7 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
8	R2/6/24 ～7/28	若松町二丁目	店舗	83.0 m ²	遺構・遺物あり	渡邊	畠ヶ田遺跡の拡大
9	R2/7/1 ～7/10	伏山一丁目	宅地造成	118.0 m ²	遺構なし・遺物あり	林・西村	
10	R2/7/29	須賀二丁目	宅地造成	1.6 m ²	遺構なし・遺物あり	林	
11	R2/7/27	不動ヶ丘町	その他建物	1.5 m ²	遺構・遺物なし	西村	
12	R2/8/3	錦織北二丁目	店舗	13.1 m ²	遺構なし・遺物あり	林・西村	錦織 ドイ遺跡の発見 本調査13の試掘
13	R2/8/31	寿町四丁目	その他建物	8.0 m ²	遺構なし・遺物あり	渡邊	
14	R2/9/2	南大伴町一丁目	宅地造成	4.8 m ²	遺構・遺物なし	渡邊	
15	R2/10/12	錦織東三丁目	その他建物	2.8 m ²	遺構なし・遺物あり	渡邊	



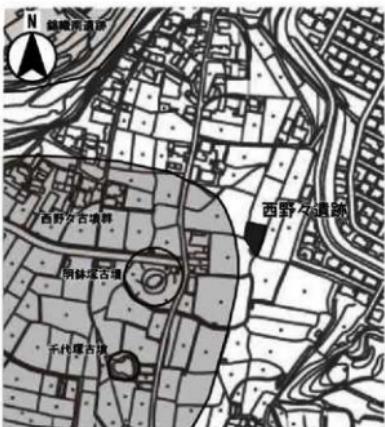
松葉山遺跡（新規発見）



錦織トイ遺跡（新規発見）



烟ヶ田遺跡（範囲拡大）



西野々遺跡（新規発見）

0 200m
1/4000

図1 新規発見・範囲拡大遺跡

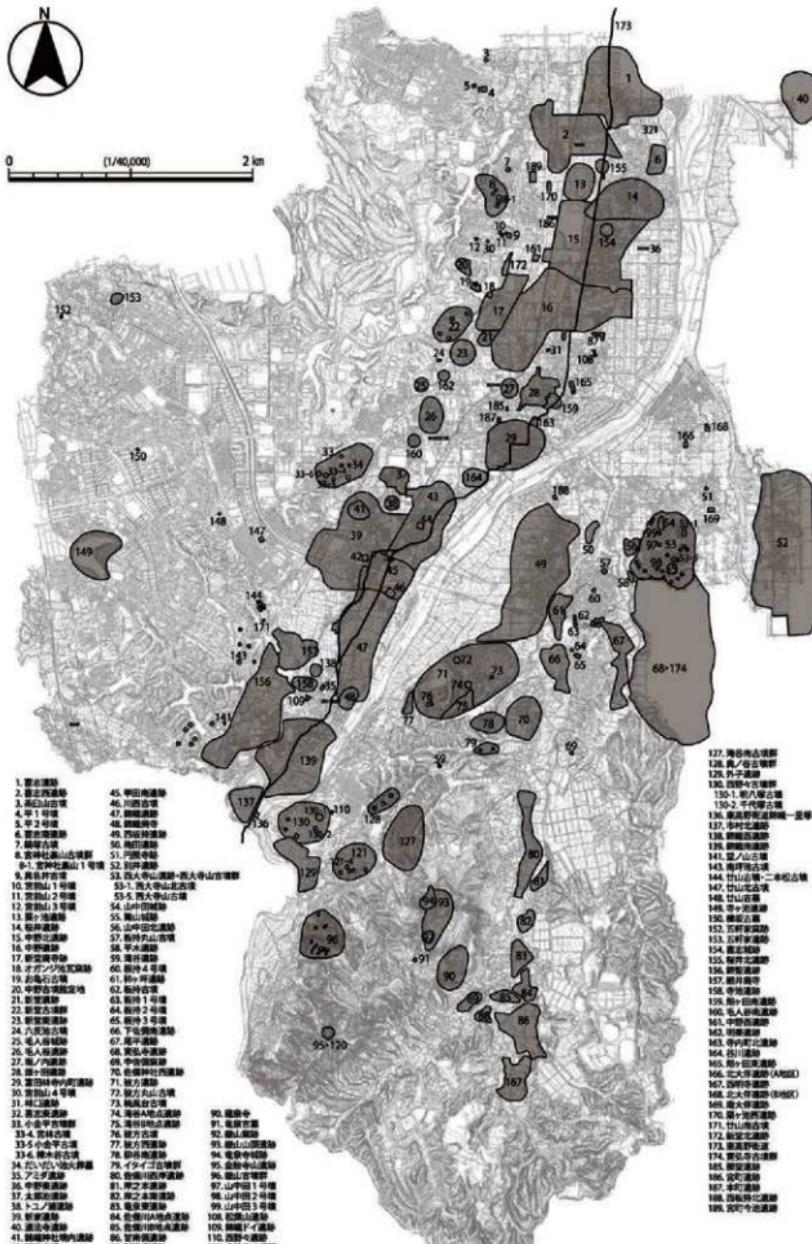


圖2 市内遺跡分布図

第2章 富田林寺内町遺跡（G C2019-1）の調査

第1節 調査の経緯と経過（図3・4、図版かがみ）

富田林寺内町遺跡は富田林駅から南へ約250mに位置する。この遺跡は、富田林寺内町を主体とする遺跡で、範囲は富田林寺内町とその周囲を一部含むものとなっている。その立地は、石川の西岸に形成された中位段丘上にあり、東・西・南の3方は段丘崖となっている。この天然の要害に3方を守られた立地が、寺内町という性格をもつ町を建設する場所に選ばれた要因の一つである。

富田林寺内町は永禄年間（1558～1569年）に興正寺別院を中心として開発され、江戸時代には在郷町へと商売の息づく町に発展した。現在では江戸時代～近現代の古い町家で構成される町並みと、建設当初からほとんど変わることなく踏襲された町割りを有することから、国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている。

富田林寺内町遺跡での本发掘調査事例はそう多くなく、報告書が刊行されているのは今回調査区を合わせても10地点に満たない。これは、遺跡範囲全体が住宅街であり、先にも記したようにその大半が重要伝統的建造物群保存地区に選定されていることにも起因している。

今回の調査地は興正寺別院の東辺を通る城之門筋に面しており、富田林寺内町遺跡の南部に位置する個人住宅跡地での範囲確認調査である（図3）。既存建物は約600m²の敷地の中に複数棟建てられていた建物の中でも北東部に位置し、江戸時代末の建築とされ、伝統的建造物に指定されていた建物である。残念なことに、伝統的建造物を含む複数棟の建物は火災によって消失してしまったため、敷地を細分化し、伝統的建造物が建っていた部分についての利用計画が持ち上がった。そのため、残りの部分の利用についても計画が立てられることを想定し、今回計画の上がった部分において範囲確認調査を実施した。

本調査は令和2年2月18日～3月18日の21日間で行い、面積は110m²である。調査初日に調査予定範囲内に2か所の試掘坑を設け、火災処理層を除去した状態と、地山直上の2面で調査することを確認した（図4）。ただし、基本的に利用計画での掘削が及ぶGL-0.6mまでしか調査できないという制約があったため、深い造構は掘削できない可能性があった。



図3 調査地位置図

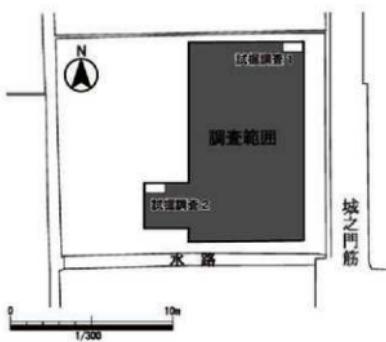


図4 調査区配置図



図5 東壁断面図

第2節 調査の成果

(1) 基本層序 (図5・6、図版1)

既存建物は火災により焼失した際に緊急性があったため、すぐに解体・廃材などの処理がなされた。火災処理による地層の擾乱は著しく、調査は火災処理層とその上に施された整地層を除去するところから始めた。その後、遺構検出ができるよう平滑とし、出来る限り地層を残す形で調査を行った。そのため、第1調査面は同じ生活面で捉えられていない。地層観察については、間口に近接する東壁(城之門筋側)が擾乱されずに大部分の地層が残っていたため、既存建物の床面(0層上面)まで観察できる部分の東壁断面で行った(図5)。また、平面調査では調査できなかった現地表面から第1調査面までの情報と、遺構面・整地層などの関係性を整理した模式図を作成した(図6)。

現地表面は、江戸末期に建設されたと言われている既存建物の床面にあたり、一部では三和土層が残っていた。その下には整地層が確認できたが、火災処理による擾乱が酷いため、東壁断面図(図5)では火災処理土層も含めて0層として捉えている。整地層と三和土は合わせて0.05m程の厚さである。その下には2枚目の三和土層(39・40層)と整地土層(41層)があり、整地土層と三和土で0.1m程の厚さである。この三和土層は複数枚重なっており、張り替えていることが確認できる。さらにその下には3枚目の三和土層と整地層があり(7層・43層)、厚さは0.1mである。2枚目の三和土層は南側でのみ確認したが、3枚目の三和土層は南側と中央部でも確認した。そのさらに下には4枚目の三和土層(61層)と整地層(37層)があり、今回の調査で確認できた一番古い三和土層である。第1調査面はこの三和土層を主体として行った。そして地山上面を整地したと考えられる整地層(24・36層)、そして粗砂礫を含んだ粘質土層の地山層(4・25・28層)に至る。地山層は平均して現地表面より-0.4~0.5mとなっている。この地山層上面を第2調査面とし、2枚の調査面にて遺構検出を行った。以上の状況は東側(間口側)で観察したものであるが、西側は裏庭空間にあたっており、地山層の上には1~2層の堆積層があり、0層となる。

(2) 第2調査面(図5・7・8・11、写真1、図版1)

遺構は地山直上と、その上の整地層(図5-24・36層)上面から切り込む遺構を同時に検出した(図7)。遺物が出土した遺構は少なく、帰属時期の分からぬ遺構が大半である。近世遺物の他、須恵器や縄目痕の残る平瓦、瓦器など古代~中世の遺物が少量出土した。遺構は調査区全域に広がるが、北側に小穴が集中し、南側は大型の溝など大きめの遺構が目立つ。小穴には柱穴といえるものが多く認められるが、建物などは復元できない。

SD143(図5・7・8・11、写真1-1、図版1)調査区南端を東西に走る大型の溝である。幅は2.2m以上、長さは両端が調査区外へ延び、10m以上である。北側の肩は検出したが、南側の肩は調査区外である。遺構の深さを確認するため、溝の東端にトレンチ①を設定し、深さが1.8m以上続くことを確

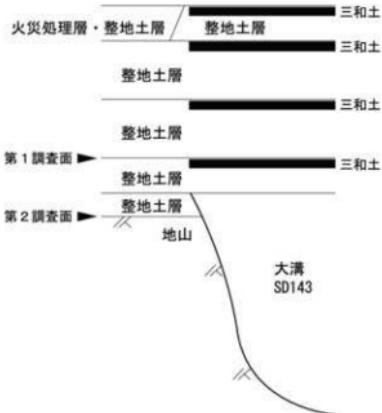


図6 地層断面模式図

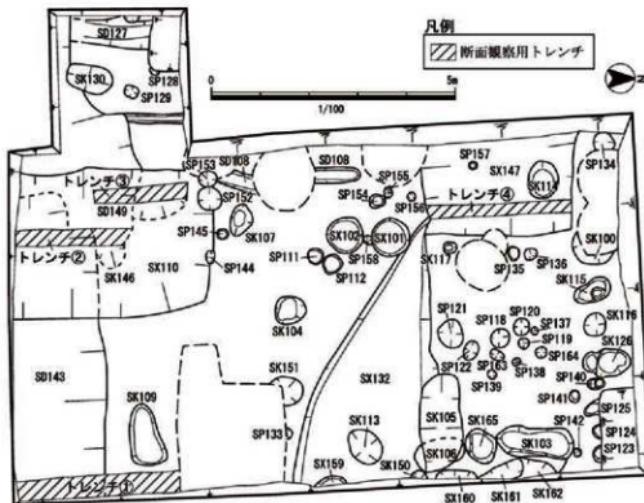


図7 第2調査面全体図

認して掘削を止めた。

SD143の中央部で検出したSX110（南北4.3m以上、東西3.1m）を掘削したところ、SD143がまっすぐ東西に延びていない可能性がでたため、追加でトレチ②・③の2カ所で溝の状況を確認した。トレチ②・③共に南側は深く、北側は浅く切りあうような断面となっている（図8、写真1-1）。溝の底盤などによる平面形の崩れや地層の切りあいの可能性はあるが、トレチでの情報のみでは判別できなかった。その為、平面形で異なる埋土が見て取れるところは遺構番号を付したが（SK146・SD149）、SD143の一部である可能性がある。トレチ①の断面を見ると（図5）、底盤を繰り返しながらも幅を狭めながら埋まっていく様子が伺える。ただし、調査区のすぐ南側には現在も水路が走り、SD143を踏襲している可能性が高い（図4）。また、SD143の周囲は地形が東に下がっており、溝の流路方向は現在と同じく東方向へ水を逃がすようになっていたと考えられる（図13-1）。この水路は西側隣地へと続いていることが絵図からも分かる（図13-1）が、現在は塞がれている。

出土遺物を概観すると、古いものは16世紀末～17世紀初頭のものが含まれているが、17世紀中頃を中心としている。この構の上に堆積する整地層（図5-34・37・56層など）からは17世紀末～18世紀前葉の遺物が出土し、少なくともその時期には埋められたと考えられる。宝曆3年の絵図（図13-4）をみると調査地より南はまだ寺内町の範囲とはなっていないように描かれている。

SX101・102 (図7・8) 中央よりやや西に位置し、直径0.7mの円形の遺構が南北に並んだ遺構である。深さは約0.15mと浅いが、埋土中に信楽焼甕片があり、埋甕遺構であったと考えられる。二つ並んでいること、第1調査面では周辺で埋甕遺構が複数検出されていることから、トイレ遺構であると考えられる。出土遺物から、19世紀第1四半期の遺構であり、第1調査面に帰属する遺構である。

SX159 (図5・7、写真1-2) 車軸中央部に位置する埋製滑槽である。槽はいわゆる溝焼槽と呼ばれる。

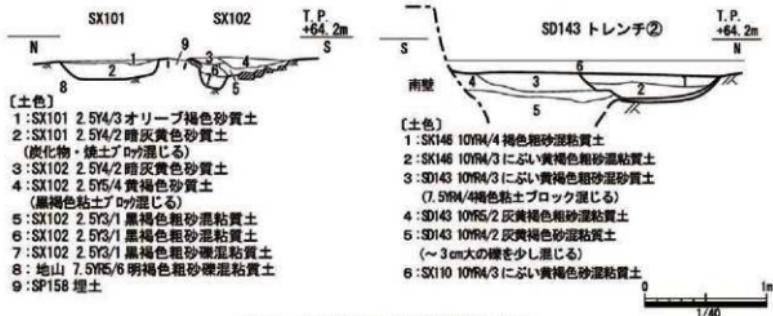


図8 第2調査面個別遺構断面図

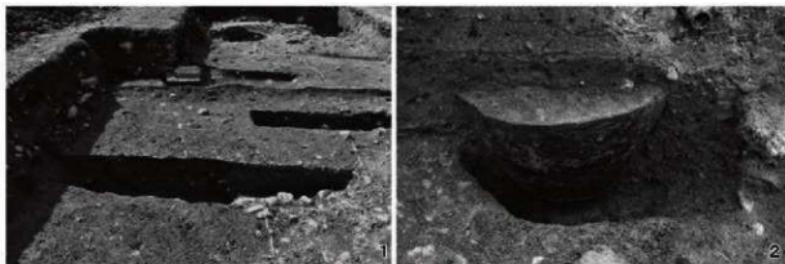


写真1 第2調査面

1 : SD143 トレンチ②(東より)、2 : SX159断面(西より)

る土師質土器壺で、上半部は削平されていた。残存する壺本体は非常に脆い状態であったため、取り上げることができなかった。北隣の遺構SK161も断面の形状から同様の遺構と考えられる(図5-9層)。また、発掘調査時には城之門筋に近すぎて安全上断念した調査区外において、工事立会調査を実施したところ、付近から土師器壺を埋設した埋壺遺構を確認している。これらの埋壺遺構はトイレ遺構と考えられ、地層の状況から地山直上より4枚目の三和土をもつ建物までの間に伴うものだろう。

SK147(図7) 北東部に位置し、西端は調査区外に延びる方形の遺構である。この遺構も大型であるため、トレンチ④を設定し、深さのみ確認した。断面形状は底面の方が狭い台形で、南北3.1m、深さ0.95mである。出土遺物は平瓦の細片のみで、時期がわからない。上面に掘られたSK114からは17世紀後半の遺物が出土しており、それ以前の遺構の可能性がある。

(3) 第1調査面(図5・9・10・11、写真2、図版2)

この調査面では4枚目の三和土層上面で遺構検出を行った。しかし、前述のように火災処理の削平状況により、前後する地層で検出を行っている場所もある。そのため、現地表面から4枚目の三和土層上面までの間の遺構を同時に検出した。

三和土(図5・6・9) 調査区南東部に東西2.0m以上、南北3.0m以上の三和土の広がりを確認した(図9網掛け部)。SD143が埋まっていた後に整地をし(図5-34・37層など)、三和土(図5-61層)を張っている。この後、同じ位置に2時期の三和土を伴う生活面が確認できるが、そのさらに上の既存

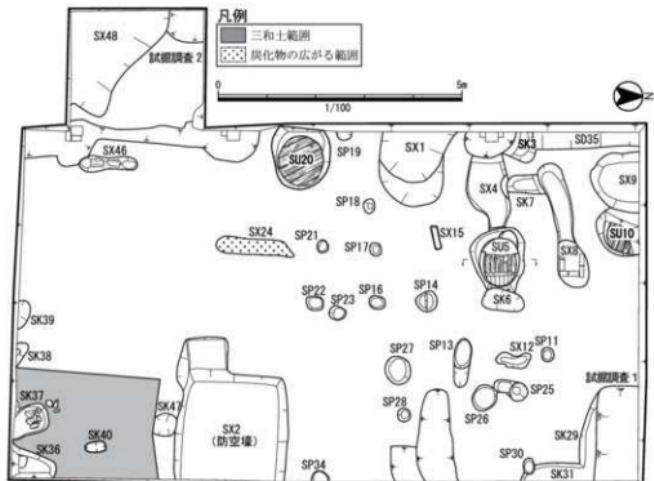


図9 第1調査面全体図

建物に伴う三和土は北側にあり（図5－0層上面）、既存建物の平面図にも見て取れる（図12）。

整地層からは17世紀後半～18世紀前葉の遺物が多く出土しており（図11～10）、溝を埋めて18世紀前葉以降に整地をし、三和土を張って建物を建てたと考えられる。

SU5・10・20・SX1・9（図9・10、写真2）調査区の北西部を中心に埋桶遺構を3基（SU5・10・20）確認した。いずれも単基で設置されたトイレ遺構であると考えられる。また、SX1・9に関しても、堆積状況から桶が埋設されていた可能性が高く、同様の機能を有していたと考えられる。年代の分かれる遺物はあまり出土していないが、SU5が19世紀前半、SU10・20・SX9が幕末、SX1が明治期に廃棄されたと見られる。年代的には既存建物に伴う可能性が高い。既存建物平面図には建物西側の外部にトイレが描かれているが（図12）、今回検出した遺構はいずれも位置的に建物内にあったと考えられる。

SX2（図5・9）三和土のすぐ北側に南北2.3m、東西2.9m以上の方形の遺構を確認した。遺構の南西部などには土を削りだした階段が設けられており、形状から防空壕であると考えられる。壁材なども中に落としまれて破棄された状態となっていた。既存建物の平面図によるとミセとされる部屋の床下辺りに該当すると考えられる（図12）。

（4）出土遺物（図11）

今回の調査で出土した遺物の中で図化したのは土師器（1・5）、国産陶器（3・6）、国産磁器（2）、中国産陶器（8）、中国産磁器（4・7・9）、金属製品（10）である。

土師器皿（1）は口径（推）15.8cm、器高（残）2.9cmで、手づくね成形の皿である。土師質土器鍋（5）は口径（推）29.6cm、器高（残）2.9cmで、京都に多く見られるタイプである。肥前陶器灰釉皿（3）は高台径5.0cm、器高2.9cmで、内面・外面底部共に砂目痕がある。丹波焼鉢（6）は口径（推）31cm、器高8.9cmで、口縁部には片口が設けられる。措目はクシ描き（5本単位）で施され、口

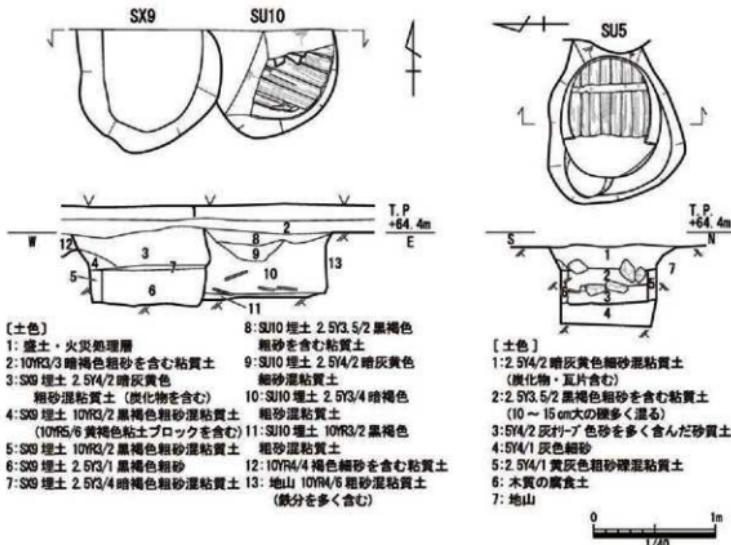


図 10 第 1 調査面個別遺構断面図

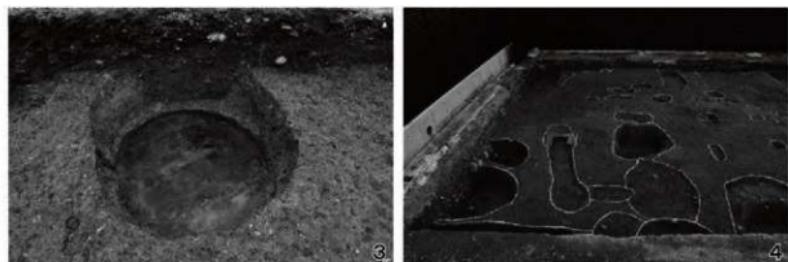
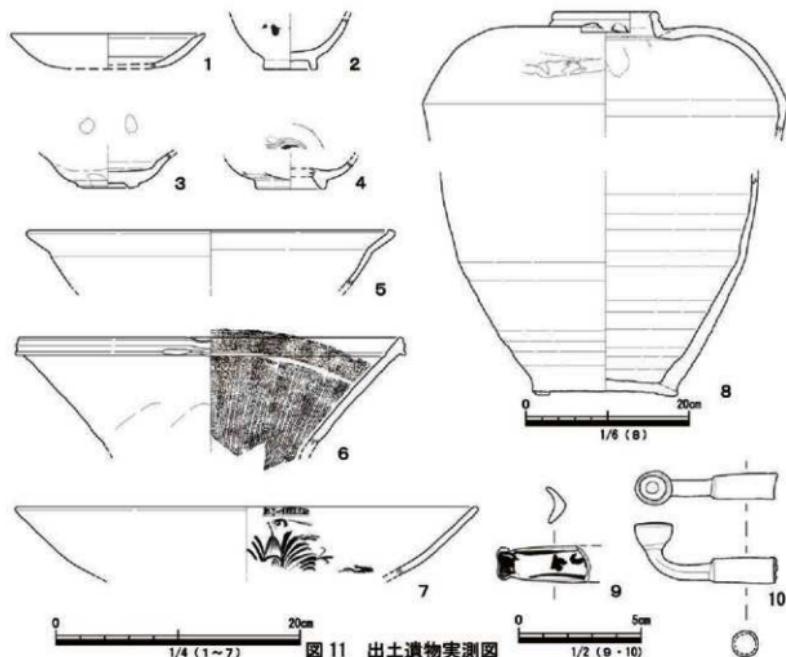


写真 2 第 1 調査面

3 : SU20 (東より)、4 : 第 1 調査面北側 (西より)

縁端部との境目に沈線が入る。口縁の形態から17世紀後半～18世紀初頭のものである。肥前磁器碗（2）は高台径4.1cm、器高4.2cmで、口縁部から鉄軸を流し掛ける。天目形の碗か。中国産陶器四耳壺（8）は口径（推）12.0cm、底径27.8cmで、鉄錆を塗布後に灰軸を掛け、褐色に仕上げている。全体的に歪んでおり、図面上では口縁部と底部との径が合わないが、復元すると器高43cm程になる。機械掘削時に東壁の北側辺りで配管により搅乱されていた地層かららみつかった。中国産磁器染付碗（4）は高台径9.5cm、器高（残）2.5cmで、高台無軸の粗製碗である。中国産磁器色絵皿（7）は口径（推）37.6cmで、いわゆる口州窯産の呉須赤絵皿である。文様の特徴から、「天下一」銘の皿となる可能性がある。中国産磁器染付散蓮華（9）は把手部分のみ出土した。金属製煙管（10）の雁首である。肩が付くタイプで、内部にわずかに羅字が残る。



1～6: SD143 断ち割り、7: SX48、9: SU20、10: 第1調査面三和土に伴う整地土、8: 機械掘削時

第3節まとめ

今回調査地の近世以前については、小穴を中心に中世遺物を含む遺構がわざかにながらに確認できた。建物などの復元には至らなかつたが、寺内町成立以前にも何らかの形で周辺の土地利用がなされていたことは想定できた。土地利用が明確化するのは SD143 の登場で、埋土からは 16 世紀末～18 世紀前葉の遺物が出土している。溝の規模が大きいことから、町の中の家庭生活排水溝とは想定できず、町の南限を区切り、町から集まつた水を段丘の下まで排出するための構と考えられる。宝暦 3 年（1753 年）の「富田林村絵図」（図 13-2・4）を見ると調査地付近が町の南辺に位置している。そして、安永 7 年（1778 年）

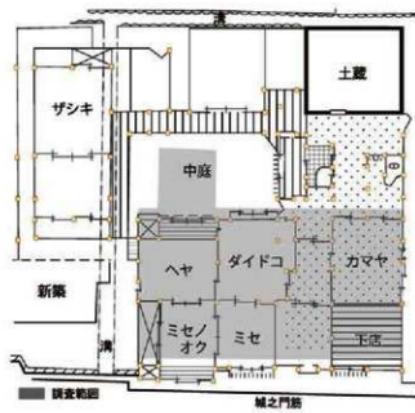


図 12 既存建物平面図（富田林市 1984 を再トレース）

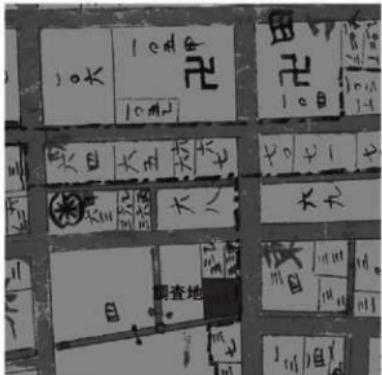
の「富田林村絵図」(図 13-3)では調査地周辺が町の中に完全に取り込まれている。今回の発掘調査結果では SD143 上面の整地層の年代から、18世紀前葉までには溝が埋まつたと考えられる。宝暦3年の絵図とは年代的に齟齬があるが、この絵図がいつの姿を描いたものかを考える材料になるかもしれない。そして町が拡張されていく様子が発掘調査から分かる良好な資料となった。

一方で、この地に町家と呼ばれる建物が建ったと確実に言えるのは、SD143 を埋め、整地をした上に設けられた三和土面（4枚目）を伴った建物である。同様の床面は4面見つかったことから、既存建物を含め4回建物が建て替わった可能性がある。

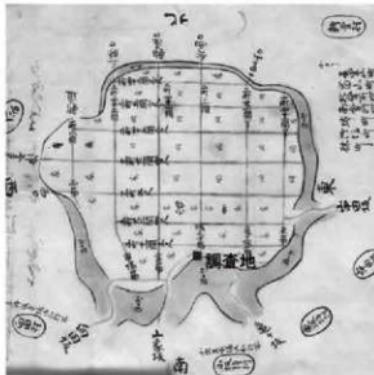
この他に確認できるのは、18世紀代までのトイレは間口近くに設けられていたが、19世紀に入ると建物の奥、もしくは裏庭空間へと変わっていることである。今回の調査地だけで言えることではないが、し尿の汲み取り方法（組織的なものも含めて）や生活様式の変化に合わせたものへとトイレの位置関係も変わった可能性がある。

参考文献

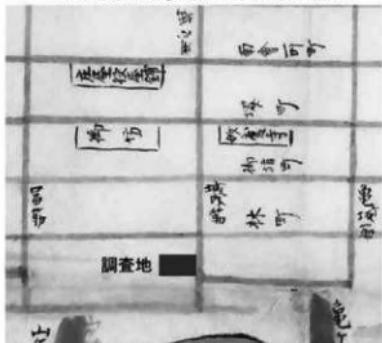
富田林市 1984『富田林寺内町歴史的町並み保全計画調査報告書』



1. 「富田林町全図」(大正 14 年 (1925)) 部分



2. 「富田林村繪図」(宝暦3年(1753))



3. 「富田林村繪圖」(安永7年(1778)) 部分



4. 「富田林村繪図」(宝暦3年(1753)) 拡大(調査地周辺)

図 13 富田林寺内町の絵図

第3章 喜志南遺跡（K S S 2020-1）の調査

第1節 調査の経緯と経過

個人住宅新築建設に伴う発掘調査である。調査地は喜志町一丁目地内にあり、石川左岸の中位段丘から低位段丘上の東縁部に立地する。調査地のすぐ東側は段丘崖で、高低差は約4mある。調査地は南北250m、東西150mの楕円形の範囲にある喜志南遺跡に所在する。喜志南遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、1997年の富田林市遺跡調査会による調査以降は、富田林市教育委員会によって5次の調査がなされている。

今回の調査地は2018年度に実施した宅地造成に伴う発掘調査地の東側で、申請地の北辺と西辺が2018年度調査地に接する区画である。調査地周辺の標高は43.4m前後を測る。2018年の調査から遺構面までの深度が浅く、多くの遺構・遺物が確認されることが予想された。また、基礎掘削深度が遺構面に到達する恐れがあることから、協議の結果、発掘調査を実施することとなった。現地調査は、令和2年5月7日から19日まで行った。実働は8日間である。

第2節 調査の成果

建物建築予定部分の北辺と西辺にL字状のトレンチを設定して調査を実施した。調査区の長さは東西10m、南北6.4mで、幅は北辺で2.8m、西辺で1.8mを測る。面積は34.5m²である。調査区全体で遺構・遺物を確認した。

（1）基本層序（図15）

層序は耕土直下地山である（図15）。遺構面までの掘削深度はGL-0.30～0.35mである。耕土層には遺物も散見するが、整地土層や遺物包含層は確認できなかった。地山はよくしまった明黄褐色～橙色の砂礫土層である。

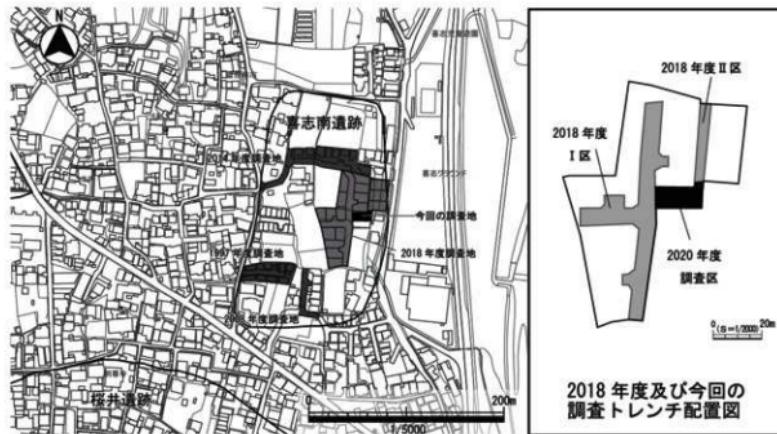


図14 今回調査地及び既往調査地位置図

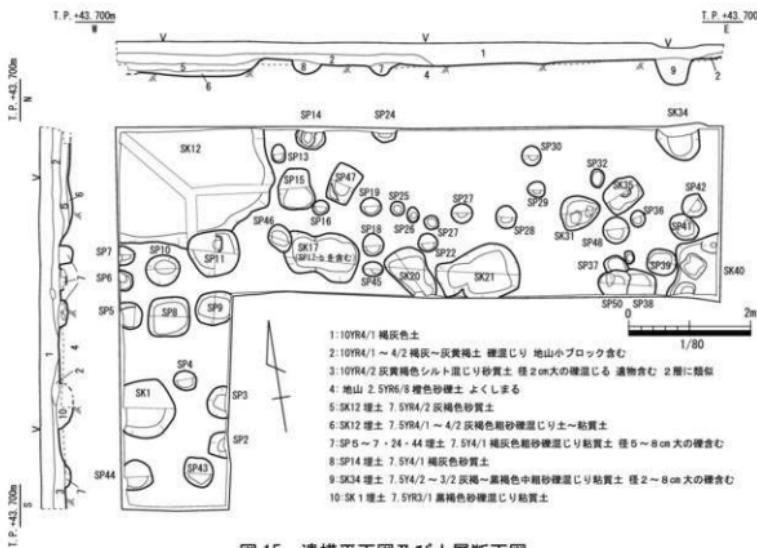


図 15 遺構平面図及び土層断面図

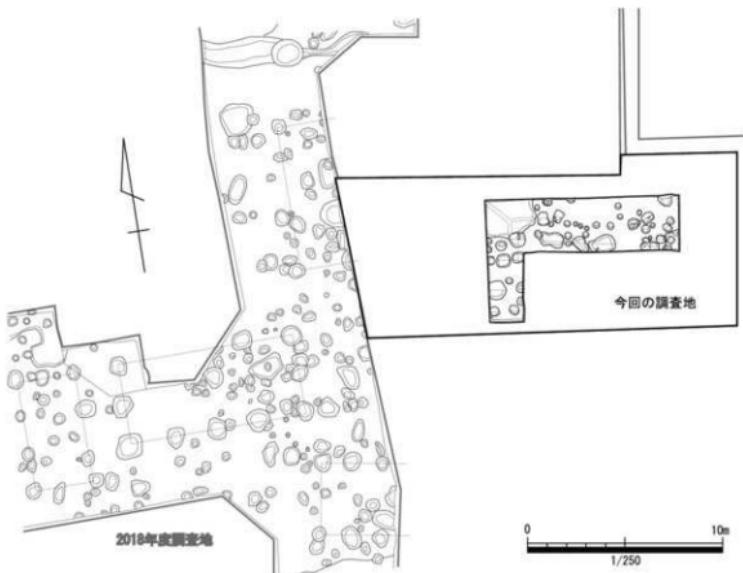


図 16 2018 年度・2020 年度遺構平面合成図

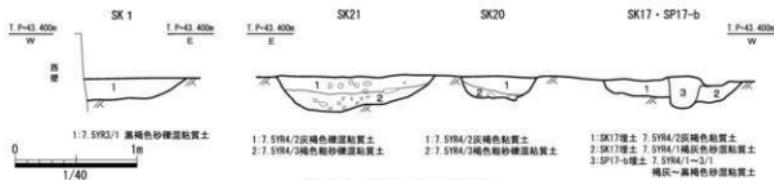


図 17 主要土坑断面図

(2) 遺構 (図 15～17、図版 3・4)

地表面で検出し、調査区全体で遺構を確認したが、緊急事態宣言下のコロナ禍による影響と調査期間等の関係から一部の遺構を除き、半掘して記録をとることとした (図 15～17)。

ピットは 44 個を確認した。規模は 30 cm 前後の円形ピットと 70～80 cm 前後のピットに大別される。上面が削平されており、遺構深度は 20 cm 前後のものが多く、深いもので約 40 cm、浅いもので 5 cm 程度である。埋土は、小さいものが褐色粗砂礫混じり粘質土、大きいものが灰褐色砂礫混じり砂質土であることが多い。埋土の明るい灰褐色系の砂質シルトに中世土器、やや暗い黒褐色系の砂質シルトを含むものに縄文土器を含む傾向がある。ピットに一定の並びがみられるものもあるが、調査区外に展開すると思われ、建物などの復元には至らなかった。

土坑は 6 基を確認した。SK1 は直径約 90 cm の円形で、深さ 18 cm を測る。SK17 は長さ 114 cm、幅 78 cm、深さ 26 cm を測り、いびつな楕円形を呈す。土坑の西半分に重複する中世のピット (SP17-b) と後世の削平によって、上層が一部攪拌している。SK20 は楕円形で、長さ 86 cm 以上、幅 64 cm、深さ 16 cm を測る。SK21 は長さ 87 cm、幅 130 cm、深さ 30 cm を測り、いびつな円形をなす。これらの土坑からは縄文土器とサヌカイト剥片が多く出土した。なお、調査区北西隅と南東隅に広がる SK12・40 は不定形で調査区外に延びるが、2018 年調査の東壁断面と照合すると包含層の一部となる可能性が高い。

調査区で検出した遺構の多くは中世に比定されるが、遺物は当該期の遺物よりも縄文土器や弥生土器、サヌカイト剥片が多く出土している。中世土器の出土がない遺構についても、埋土や遺物の状況などから検討が必要で、縄文土器の出土をもって、遺構時期の決定的要素とするにはやや困難といえる。ただし、SK21 及び SK17 に関しては、縄文土器のほかに石鏃と 2 次加工がみられないサヌカイト剥片や碎片が多く出土しており、剥片や碎片の様相から一時的にその場で石器製作をしていたと思われ、縄文時代の遺構の可能性が高い。

(3) 出土遺物 (18・19、写真 3)

遺物はコンテナ 1 箱分で、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、サヌカイト剥片を確認し、26 点を図化した (図 18・19)。殆どが遺構出土遺物で、全体の 8 割以上を縄文土器が占める。縄文土器の多くは、中世土器の小片や磨滅した古墳時代後期の土器と共に伴する。

古墳時代以降中世の土器 (1～7) 1 は土師器壺で、調整は磨滅し不明瞭である。中世土器を含む SP 8 から出土し、共伴した古墳時代後期の須恵器と同じ頃のものであろう。2・3 は土師器小皿、6 は土師質土器の羽釜である。いずれも包含層から出土した。4・5 は瓦器で、見込み部分に暗文がみられる。SP17-b から出土した。今回の調査では和泉型瓦器壇だけではなく、口縁端部に段を有す大和型瓦器壇の小破片も数点確認している。隣接する 2018 年度調査では 12 世紀後半～13 世紀の遺物を主体としており、今回出土の中世の遺物も同時期のものと思われる。

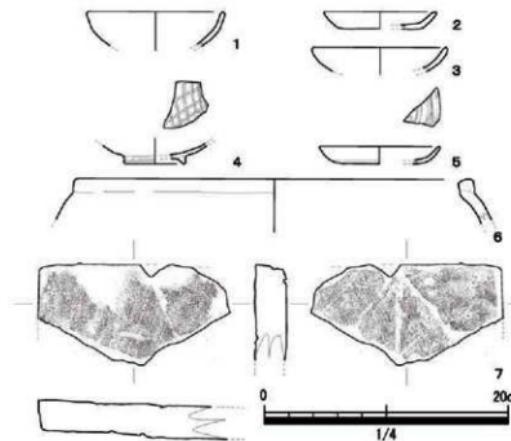


図18 出土遺物（古墳時代～中世）

7は須恵質の平瓦で、12世紀後半～13世紀初頭のものである。2018年度調査ではこの時期の瓦が出土遺物の多くを占めたが、今回の調査では7以外は平瓦の小破片2点を確認したのみである。

縄文土器（8～23）出土した縄文土器の大半は、無文の粗製の深鉢の胸部小片である。特徴的なものとともに、形状のわかるものを図化し、外面のみ拓本で図示した。8～10がSK1、12はSK35、13～20・22・23はSK21、21がSK17からの出土で、11は包含層からである。

8・9・11・13・14・16は小片

で断定できないものもあるが、精製の浅鉢である。8はジグザグ文、9は木の葉文の可能性があり、撻原式文様の一部を表すか。16はやや波状を呈す口縁端部をもつが、表面の磨滅が著しく、調整は不明瞭である。13・14は大洞式の浅鉢の小片で、東北地方から搬入された可能性がある。撻原式と並行関係にあり、ほかの縄文土器と時期的な齟齬をきたさない。大洞式の縄文土器は、喜志南遺跡では今回の調査以外に、2018年度調査と2014年度調査で、その可能性のある破片を各1点確認している。また、大阪府教育委員会が行った錦織南遺跡の1981年度調査では、形状のわかる大洞式の浅鉢がみつかっている。

10・12・15・17～23は粗製の深鉢である。内外面ともナデないしはケズリを施し、丁寧なつくりである。口縁部がゆるやかに「く」の字に外反するタイプのものが散見される。22・23は底部片で、くぼみ底を呈す。

今回出土した縄文土器は、基本的に晩期中葉の篠原式の範疇に収まり、2018年度調査で出土した縄文土器と同時期である。

註 縄文土器については、京都大学 文化遺産学・人文知連携センター 千葉 豊氏の多大なるご教示を得た。ここに記して感謝します。

石器類（24～26、写真3）多くの遺構から縄文土器と一緒に、サヌカイト剥片が出土している。ここでは圧倒的にサヌカイトの出土量の多かつたSK21から出土したものを示しておく。

SK21からは石礫2点（24・25）と2次加工を受けていないフレークやチップを含むサヌカイト剥片58点（写真3）が出土した。

このほか包含層から、石刀の可能性のある石棒（26）を確認している。残存長14.6cm、幅2.9cm、厚さ1.2cmを測り、紀ノ川流域で採取された結晶片岩製のものと思われる。

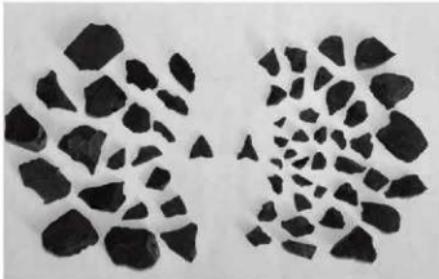


写真3 SK21 石礫・サヌカイト剥片

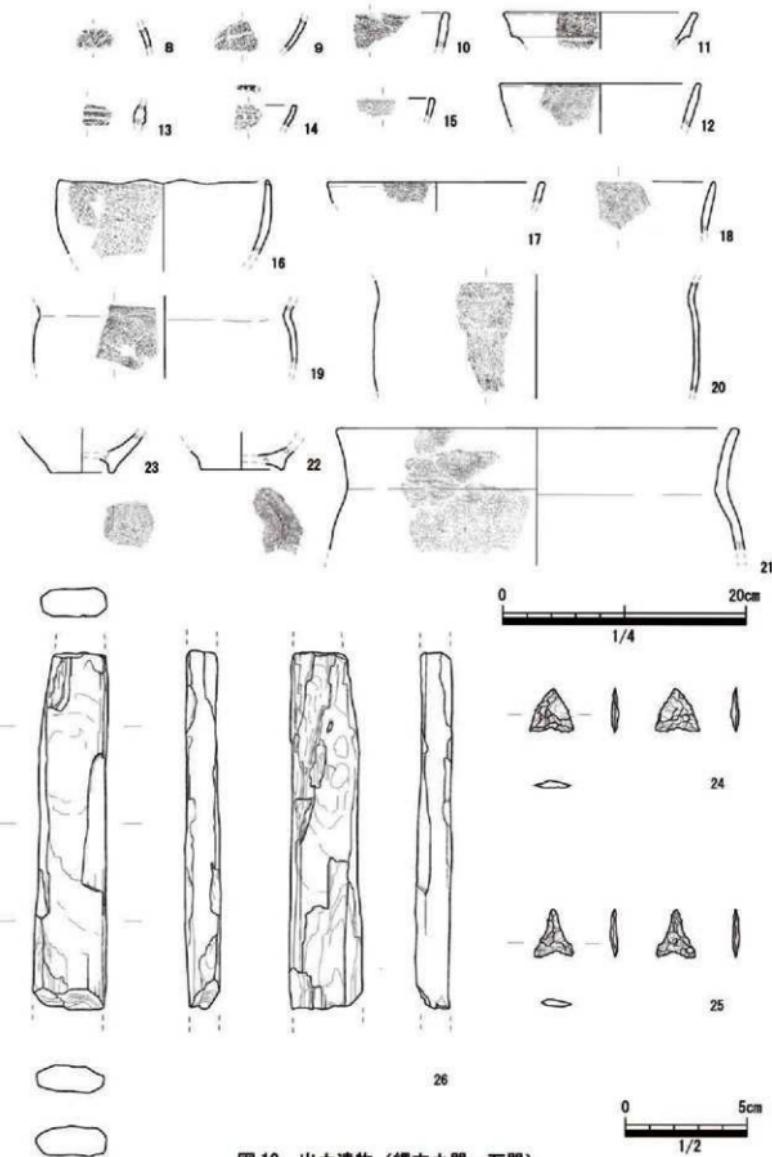


図 19 出土遺物（縄文土器・石器）

第3節 まとめ

喜志南遺跡は調査次数こそ少ないが、もともとが営農地であったところの開発に伴うため、面的な調査が多い(図14)。ここでは整理中で未報告のものも含め、既往の調査と照らし合わせてまとめておく。

喜志南遺跡の開発は縄文時代からはじまる。今回の調査地のほか、1997年度調査地や2018年度調査地北端、その北側の2014年度調査地では多くの縄文土器が出土している。北側の低い場所で後期後半以降、南西の高い場所で晩期の遺物が多くみられ、遺構は1997年度調査で集石土坑を確認し、今回の調査では2次加工のみられないサヌカイト剥片を含む土坑を2基検出した。2014年度調査では多くの後期後葉～晩期の縄文土器が出土し、当該期の中心域であった可能性が高い。これらの範囲には弥生土器もわずかに混在するが、全体的に遺構・遺物とともに希薄で、中心域は北西の喜志遺跡に移ったと思われる。古墳時代中期になると2014年度調査地北西では、床面に円筒埴輪片を敷き詰めた小石室をもつ6世紀後半以降と考えられる埋没古墳が見つかっている。使用された円筒埴輪は5世紀前半のものであるが、これより時期の新しい埴輪片が2014年度調査地をはじめ、2018年度調査地や2008年度調査地から出土している。近隣に古墳の存在を想起させるが、埋没古墳以外の古墳時代の明確な遺構は、2018年度調査地南端の溝以外は不明である。さらに2007年度調査、2008年度調査、2018年度調査では古代～中世にかけての遺構の広がりを見せている。2008年度調査では2棟の平安時代の建物を検出した。2018年度調査では少なくとも5棟以上の同時期の建物のほか、平安時代末期～中世にかけての鬼瓦と共に、複弁蓮華文軒丸瓦など、当該期の須恵質の瓦が多く出土し、近くに村落内寺院と思われる瓦葺建物の存在が想定される。両調査地間には約2mの小さな段丘崖が存在するが、遺構のあり方や主たる遺物の時期は同じである。今回の調査でも12世紀後半～13世紀に帰属する遺構を多数検出し、2018年度調査同様、段丘端まで広がりを見せている。中世後半以降は近世にかけて段丘上の高い部分を削平し、低い部分へ数回の整地を行ったことが2018年度調査でわかつており、その後は現代にいたるまで耕作地として利用されていた。以上、遺跡内の土地利用の在り方について、ある程度の傾向が見えてきたことも今回の成果の一つといえよう。

今回の調査に限って言えば、調査当初想定していた、隣接する2018年度調査で確認した平安時代末期～鎌倉時代にかけての多くの瓦片や整地土層はみつかなかった。また遺構内の遺物は縄文土器片が多いが、そこに12世紀後半の大和型瓦器焼片をはじめ中世土器も共存することから、遺構は、2018年度調査同様、基本的に中世のものが多いと思われる。ただ、中世土器は上層部分に限られるものが多く、おそらく中世の開発時に先に埋積していた縄文時代の遺構面が破壊されたと考えられ、縄文時代の遺構に混入した可能性も否めない。実際、調査地南西部の2018年度調査区でも縄文時代に帰属すると思われる遺構をいくつか確認している。詳細な様相の解明は調査地周辺の今後の成果に期待したい。

これらのことから、2018年調査で想定された村落内寺院の、小さな仏堂と思われる建物に伴う影響は今回の調査地には及ばないことが分かった。つまり、瓦葺建物は多くの瓦が出土した2018年調査の北西部に存在したと範囲を限定できるといえ、今回の調査の大きな意義といえる。

参考文献

- 田中正利 1998『喜志南遺跡』 富田林遺跡調査会
藤田徹也・青木昭和 2008『甲田遺跡・喜志南遺跡 発掘調査報告書』 富田林市教育委員会
近づ飛鳥博物館 2016『喜志南遺跡』 平成27年度冬季特別展 歴史発掘おおさか 2015～大阪府発掘調査最新情報一』
近づ飛鳥博物館 2020『喜志南遺跡』 令和元年度冬季企画展 歴史発掘おおさか 2019～大阪府発掘調査最新情報一』
近づ飛鳥博物館 図録79

報告書抄録

ふりがな	れいわ2ねんど とんだばやししないいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ
書名	令和2年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	富田林市文化財調査報告
シリーズ番号	69
編著者名	西村 雅美、渡邊 晴香
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL0721-25-1000(代)
発行年月日	2021(令和3)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とんだばやし じないまちいせき 富田林 寺内町遺跡	とんだばやし ちょう 富田林町	27214	34° 29' 57"	135° 36' 9"	20200218 ~ 20200318	110.0 m ²	範囲確認 調査
きしみなみいせき 喜志南遺跡	きしちょう いっちょめ 喜志町 一丁目	27214	34° 31' 17"	135° 36' 54"	20200507 ~ 20200519	34.5 m ²	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富田林寺内町 遺跡	集落跡	中世 ~近現代	大溝 埋桶 埋甕 三和土	土師器 陶磁器 瓦 金属	調査地南端で検出した大溝は 一時期まで町の南限であった と考えられ、その始まりは寺 内町成立期にまで遡る可能性 がある。
喜志南遺跡	集落跡	縄文 ~中世	土坑 ピット	縄文土器 土師器 瓦器 石器	

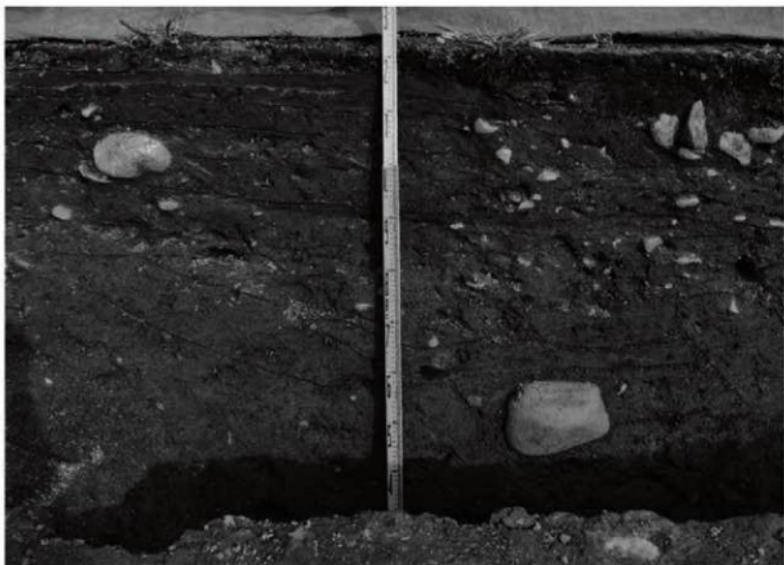
図 版



富田林寺内町周辺航空写真（富田林市撮影 2018年）



第2調査面全景（南より）



SD143 トレンチ①東壁断面と三和土層のようす（西より）



第1調査面全景（南より）



第1調査面北側完掘状況（西より）



検出状況全景
(西から)

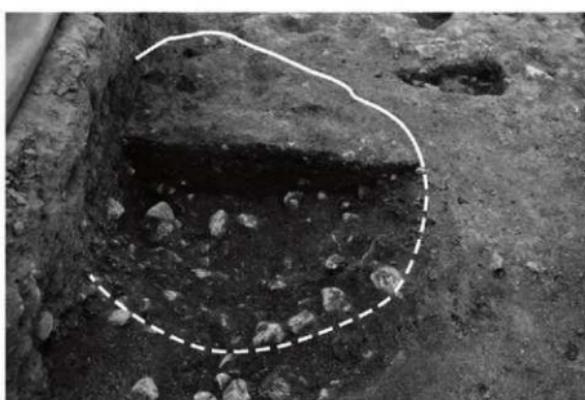


調査区西側全景
(南から)



調査区北側全景
(西から)

図版四 喜志南遺跡 (KSS2020-1)



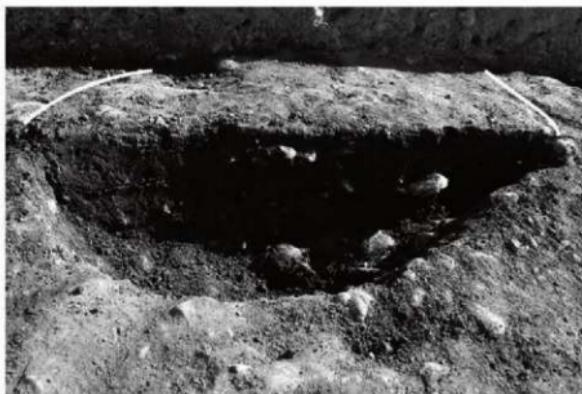
SK 1

(南から)



SK17・SP17-b

(北から)



SK21

(北から)

令和 2 年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書

発行年月日 2021 年 3 月 31 日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町 1 番 1 号

印 刷 明朗社

